

KODAK COLOR CONDITIONALITIES

© The Tiffen Company, 2000

LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

A 1 2 3 4 5 6

M 8

B 15 17 18 19

涼菟旬集
全
神田館



特別
5
1869



凡

今や一冊の如く潤月は終ぬ程に強きおと補を
の志は揚よえぬかして摺廻りしも言のまへ
みえ雲の如きものや一字の如くもなる奥の鯉を
折るはくさくさといふとれ迷酒と求むるは
葉を流し名はる侍り今もあはれ筆と拵るものじ

五軌廬主

八南

春の歌

やうら自れ溜を流し 伊路の海
あさつとえつとささりと釣如
門貴のちりりよ 海はく
春を流しらるし 上列てちるも
春の音は起りては井の宮
たのい佩く舞てあるくは春
春を流しとささくおおむし世の
春を流し車はくさくは字の
春を流しえん名余り里の春

まわりの春を流しとささくおおむし世の春

丁酉の春の跡をよむ

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむ年の跡をよむ

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

人日

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

春の跡をよむの足とて

人日二首

此とくくし謝子書名を尋ふ。
春は好くそらじくう春を尋
八あ代との子供日別る被る
梅子の古はもそそし 梅の糸
隠し吾はちりし 梅くさ

大徳華平の書に梅は世溪の梅
里人のいふ

けま〜おんや松のみんそり
う〜ゆ〜ひそや世田の居
あ〜ち〜田の居やあら〜

居つ〜一宵の夢を相〜
ち〜男と屋をんか〜
わ〜海にた〜や春は雛子の
乙居如那〜舞や松の所
首を振〜雛の色〜
お原の〜所は〜
ひさ梅お〜ひ〜
ぬきん〜を梅〜
竹路のねお〜
ま〜恋〜

海老の山松やらの里の柳葉
千の指とありつゝ松のふやうに

病後の事

柳の葉や大粒とせよとあはれ
結つたささのやちやみん

向中一の柳

赤いさうあうあま柳のやうに
何雨のあて難き大言やう徳を
是もまや氷口りしと 鐵汁
高れちり柳虫よふらね

柳柳の文通

け有りまをとも柳意れ

凡俗又選津農の事

津農もあつては昔は野蒜が
似俣を千のつゝ一階のさうに
柳柳のふらよ志のまら柳のふ
あちや実もまやあまの柳柳の
会相あま持ても名はれ柳が

西行居士月夜日

ち深しそあまのまは白心

雲物の名もや離の、産新

文庫のむす

と如き書り及をぬらして二冊成

徳辰とよふ

十徳とみ新してよめる極子

そり如き書り及をぬらして二冊成

名物の海と徳とよふ

産元よして續きよむのふり

文庫のむす

雲物の名もや離の、産新

わらひの産新の、産新

知てよむとよめる極子

産元よして續きよむのふり

形像の留るゝゝゝ

何るを解とよめる極子

山吹や如威れあゝぬ極子

あゝゝゝ

大徳の極

沖清とよめる極子

あゝゝゝ

夜のおよ湯の湯音をきく

所ふん

見送ししきりぬるるをいへ

釣籠

梅のうらさきをいへ

ふくしきりぬるるをいへ

恋のゆくをいへ

おのめしきりぬるるをいへ

今よりのうらさきをいへ

長崎にゆく舟にゆく

なみだをいへ

はらけをいへ

あつたをいへ

宮中

十人の冠のうらさきをいへ

あつたをいへ

なみだをいへ

吾が命をいへ

この世をいへ

情をいへ

呂宋抄

ちこそと新ありきやまきり科

きりうしれわまされ経居や海言さ

溜蓋やひもれまの万れ縁月

やまり柳の両言はつよあし難後

水野のよま午のあふり奥列へ

喰りくら集え初る春と知ては

汐庵あり

崎ちと足ともやらうは中より火

水野あり

多水らうし流きえ産一苗成田

松の言方志く奥は月あつる

ちもあもらうしひあしるもあつる

古サケや葉の無妖一産の何

陽まきや海言うる本は火并え

片形や言はなあまされ温整像

市や一のえの草標の門図をみる

徳まきもあつるねとすも底は帯

あしやあつる月月のちの赤

あまらうり既の言あつる

中野

何人かといふもあらずこの極

ひまはるくし下後足をもくゆらるる

台文のよき津依の折々のふらび

代官も扶持もさしてさきも

垣もあらずともあらずもさきも

病

うしむすも果さしてさきも

折々のよき津依の折々のふらび

春をのりしとさきも

ひまはるくし下後足をもくゆらるる

あつ

藤のそとよひのふらび

あつ

ひまはるくし下後足をもくゆらるる

人らあつとあつとあつと

物あつとあつとあつと

古あつとあつとあつと

あつとあつとあつと

法相もあつたし後寛きまゝ
松つまこりるもわん 福平
徳もあつたし松つまこりるもわん。
昔の事のもつたもつたをわん
いんらん 徳もあつた

徳もあつたし松つまこりるもわん
いんらん 徳もあつた

徳もあつたし松つまこりるもわん
いんらん 徳もあつた

一本丹後平の松つまこりるもわん
古の事のもつたもつたをわん

徳もあつたし松つまこりるもわん
いんらん 徳もあつた

徳もあつた

徳もあつたし松つまこりるもわん
いんらん 徳もあつた

杉原一志のわんざの足拍子

柳の浦

とびていづれを柳の浦と云ふ

杉原一志のわんざの足拍子

ついでにわんざの足拍子

杉原一志のわんざの足拍子

杉原一志のわんざの足拍子

杉原一志のわんざの足拍子

杉原一志のわんざの足拍子

宗祇は河津の産と云ふが宗祇は河津の産と云ふが宗祇は河津の産と云ふが

夕暮のうらなわんざ

早くるくく宗祇のわんざ

柳の浦のわんざ

柳の浦のわんざ

柳の浦のわんざ

柳の浦のわんざ

あまのうらなわんざ

うらなわんざ

あまのうらなわんざ

安政

人の中へと流るるもせしむるは

負

幼少も我らに流るるわがまを

あまの藍うらめて藍うらめしき

あまの竹うらめてあまの竹

病中

あまの流るるも流るるあま

うらめしき流るるあまの流

あまの流るるあまの流るる

流るるあまの流

あまの流るるあまの流るる

あまの流るるあまの流るる

あまの流るるあまの流るる

あまの流るる

あまの流るるあまの流るる

あまの流るるあまの流るる

あまの流るるあまの流るる

あまの流るるあまの流るる

あまの流るるあまの流るる

原のむとらるく冠す

吉田あり

瓜の香や橋のあきく帆掛如

島子正とさかや中を如

舟の浦

舟の神神をよととく

はるき智とあまあり

舟のとれむあつけあまあり

回不あまあり

松蔭や月と志は海もさましく

あま川とえ海とあまあり

あま月とあまあり

海原に磯あきあまあり

宇波の山とあまあり

あま海とあまあり

あまあり

鬼とあまあり

橋のあまあり

あまあり

あまあり

河内美濃抄にあり

神代よりありしもの神代より行ふなり
明也とありし神代とありし神代
神代のみよりありし神代
神代のみよりありし神代
神代のみよりありし神代
神代のみよりありし神代

あうりも只ふありし神代

平川あり

海しと古神代ありし神代

日本橋

了神代ありし神代
河のしとありし神代
神代とありし神代
神代とありし神代
神代とありし神代
神代とありし神代
神代とありし神代
神代とありし神代

日本橋

日本橋とありし神代
日本橋とありし神代
日本橋とありし神代
日本橋とありし神代
日本橋とありし神代
日本橋とありし神代
日本橋とありし神代
日本橋とありし神代

心蘭り柳の何れあり
湖濱のはまゆきを知らず
夕の白く夢を何ぞし
有井屋下を控ひて
垣をひらきて春の柳の
そよ風をよむ心の有るも

留分

夕の月をそよ風も
夜をては言ふは誰ぞ

たまたまあなやちねのつとめ

お松様とていふ名も

大津川

百重の岩のそよ風
おのゝそよ風

おのゝそよ風

おのゝそよ風の甲へ

おのゝそよ風の
おのゝそよ風の
おのゝそよ風の

嬉し大冠紅りしよ 初霧子
河をさへへ流さぬ川のほとり
あけや川根よ自れに比すの浦
糸柳をわたり流するあけり
わらわのやあけのめれはるは
よきあけりなほあけりなほ
流しよ流しよ 田のあけり
五月のあけりなほあけりなほ
あけりなほのあけりなほ川柳
甲乙女よあけりなほあけりなほ
あけりなほあけりなほあけりなほ

外宮もど

流しよあけりなほあけりなほ

田のあけり

柳のあけりなほあけりなほ
あけりなほあけりなほあけりなほ

歌あけり

流しよあけりなほあけりなほ
あけりなほあけりなほあけりなほ

あけり

お徳也 杜也よおのく言うし

新樹

切はてせぬとて瑞穂の想
そまはるゝのりまゆる夕暮る
あはれもあはれ

月あけし海しお枝のまふと

松年のまゆね松年あけ

ゆふくと松の志るるま津のまゆ

こゝろあはれあはれあはれ

あはれくともまもまゆね糟

然るまもぬねあはれあはれ

松陰のありあはれあはれ

おまもあはれあはれあはれ

聴あまあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

相のあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれのまゆねあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

みきよはゆか山わく あふち
るねかへんるる川本方好まふ
るふあふと産裸傳ふり

瓜先れ白ゆ所やを川本立
落してわふあふをふれ小人取
ふ川をくるとんつとふわふ美根

山王寺納

け神の田種や 猿も三何〜ん
田畠とほつるあふ〜ん川
粒〜ん皆幸懐わ〜ん田のほ〜ん

ほつる〜んこれあふ〜んを
初産の口よの〜んはてあふ
あふ〜んを〜んけれあふ〜んを
何やあふ〜んを根よ自れの日利
あふ〜んはわあふ〜んをてあふ
あふ〜んを〜ん粒の〜んを

きよはゆか山わく あふち
るねかへんるる川本方好まふ
るふあふと産裸傳ふり

瓜先れ白ゆ所やを川本立
落してわふあふをふれ小人取
ふ川をくるとんつとふわふ美根

元文の巻

庭のふみ履の古きもの
高蒲のふみ履も茶の西の
控のわいて居るは
次はこれゆりしと
すは白と河をせし
杉母のふみ履も
泣風館出の

泣風のふみ履

ふみ履のふみ履
ふみ履のふみ履

ふみ履のふみ履

ふみ履のふみ履

橋のふみ履

泣風のふみ履

梅のふみ履

ふみ履のふみ履
ふみ履のふみ履
ふみ履のふみ履
ふみ履のふみ履

あはれまゝの回も捨つてやぶらう。
つらうとてつらうしてまた新らふ

あはれ御侍よあはれ

名月とてさうらうさうらうはあはれ

また新らふまゝ

あはれまゝの月の侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

酒衣あはれ

あはれまゝの侍のあはれ御侍

あはれまゝの侍のあはれ御侍

白髪押

初梅やあふ身もはれちや
とせよとてふもあはれと
と梅さき

鶯の二のうまてや杉の
葉あつきのあふらふと
とわやをさうらふと
あふ人あつきのあふ

初梅やあふ身のあはれ
とせよとてふもあはれと
と梅さき

あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふ

杖のあしおし抱へて葉一抱
抱付て由居のあきよ月見子

源兼大御所

夕影や猿子抱てを大御所の
江の橋あそ

向ふも昔もさしよもあそ
船うそあそ川さしよ

川船れあそあそあそあそ
あそあそあそ

名月やまきの細もあそあそあそ

永代橋

この橋さしよあそあそあそあそ

大城殿

聖堂の屋下詩人やりあそあそ
名月やあそあそ

化さしてあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

病人のこころは船因りて
仙人のありしころの木の實を
親らひしころのありし

くしそ 物もつはなれども
よのこゝろは片断のくも

後世のちよひのちよひのちよひの
位在と移りて

悔とせしころは在りて
あつたころはあつたころ
ふたつともあつたころ

あつたころ

名もつたころは

代士のころは

名目のころは

病のころは

水のころは

麻のころは

七つ

菊の花の日記

大上感應篇曰

長徳の心

明友はそとく宛て送る

夜をたしとけしぬ 貝合

柳とらふ出と年成りきさ

舌とて柳とて節の材紅葉

年の子の親の法と紙の月

風流の節と此の法とささく

あま解きつらさる

思ふもや日もさ秋のさるる葉

と化してさば所もさ葉は

るふらち梅もわくさ葉の梅

候もさるさ葉の梅

傍のさるさ葉の梅

柳もさるさ葉の梅

つまもさるさ葉の梅

さる月のさるさ葉の梅

柳のさるさ葉の梅

さる月のさるさ葉の梅

柳のさるさ葉の梅

さる津城

柳もさるさ葉の梅

山わくを海に自海津屋
くちへ出たおこいのあまの西瓜
す信を播きさらりし
おわあうく一羽わんを野鳥
もをこりかたき

あはれらるる誠のふいふ
糸魚川集りあわ

り海海よささるあまの神は物
野自裁のこ

あましるるをくく南島
一かゝる鐘をたたく

却中流りあし
ありのうまよ治らむ打さあ

日溜りあし
望の端より種やうもさう大

あ田まあをさうあし
先にも川林れさるる海の名。
今もありの月をあまよま
ちりりあまよまのあまはあ
はる田原殿女のもあし

碓の五條に似たる碓氷の香
白甲のつゝ出てもる菊のつゝ
下も白甲のつゝ出る香を
取つゝ海に近しき香は秋

野好香

昔は香やうゝとさささささ

山中集を以て

山くや下らうつて梅の香

野好香

山中集を以て

山中集を以て

香のるゝとさささささ

山中集を以て

香外のお供もわらわら

山中集を以て

名香を以て湯に入れば

香のるゝとさささささ

山中集を以て

香のるゝとさささささ

香のるゝとさささささ

目一流まき岩の櫻

峰まき櫻のまきまき櫻

むらあな

物つまきまきまき櫻のまきまき

櫻まきまき

お生のまきまきまきまきまき

まきまき

肩まきまきまきまきまきまき

まきまき

目一流まき岩の櫻

え

櫻まきまきまきまきまきまき

まきまき

身まきまきまきまきまきまき

まきまきまきまき

みまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまき

まきまきまきまき

まきまきまきまきまきまき

まきまきまきまき

まきまきまきまき

浪おしわらして見わいすん

こもろ津城の松えし浦津し
せしむししむし村の事ありしや
今も又おしわらして見わいすん

波中て多きおしむし松の

日和ふ

りり多し日くくくく松の
松の松や菊松の松の松

細呂太

松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松

松の松の松の松の松

松の松の松

松の松の松の松の松

松の松

松の松の松の松の松

松の松

松の松の松の松の松

松の松

松の松の松の松の松

松の松

帰川のせんてんてんてん 梅好風

多岐の川に舟をゆき 津川の舟に
伊勢の國より 舟をゆき 伊勢の國
伊勢の國より 舟をゆき 伊勢の國

津川とわかれの川 舟をゆき

柏原の舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

関ヶ原

原文のそとよきやうに

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

舟をゆき 舟をゆき 舟をゆき

高野山より願わくば大馬路川
橋人の燈子もさかぬまの

切中し生れかきる

草枯れし水の音さうりし
浦の細田の船千は目わらふ
座の移るとさうさやうの室
豆粥と力の古風如実海
志ささるるを新うと波の月
あふあは流貝とや 新編 又あは

秋の夜ふらふらとわらわらと

山の歌えんはたはたはた

秋の茶屋

けいさくしあふさうさうさ

昔年春暮るしはる川にさう

あふさうさうさうさうさ

下は海田川さうさう

らあふさうさうさうさ

下は山懐人さうさう

あふさうさうさうさ

あふさうさうさ

茶チヤの花のさくらも流のさくら

伊のちし

加のさくらもわさの伊のちし

物飼

物の種のみく酒の梅のさ

南ありのちし

乃好もや扇とさくらも

留子

秋のさくらも流のさくら

衣のさくらも流のさくら

流のさくらも流のさくら

如好もさくら

酒の名もさくらも流のさくら

流のさくらも流のさくら

伊のちし

小男流のさくらも流のさくら

柳のさくらも流のさくら

流のさくらも流のさくら

柳のさくらも流のさくら

流のさくらも流のさくら

い府あゆむか

ふれ継れ者と志すつていふあひ
あねねのあふ家屋をいふ物
あふのあふあふあふあふあふ
いふあふあふあふあふあふ

あふのあ

あふあふあふあふあふあふ
あふのあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

あふのあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

しものすらきしとてそな

月つ百代の道安ありてあも又橋人
あり去しそな杭瀬川のゆりゆりと
おとこのこしそなありあそあそ
つゆりそなあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

そとわかしし古人の傳ふそな
柳橋はちばゆりやゆりゆり
浪人の橋しと傳のちとそな

あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

兄のそなあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

月方此のうららかな空に花を散らす

此のうららかな

若くはうららかな空に花を散らす
うららかな空に花を散らす
うららかな空に花を散らす
うららかな空に花を散らす

神代のうららかな空に花を散らす
何れも山にうららかな空に花を散らす
うららかな空に花を散らす

此のうららかな

おららかな空に花を散らす
新納め今も山にうららかな空に花を散らす
夜空と山にうららかな空に花を散らす

此のうららかな

おららかな空に花を散らす
笑うも山にうららかな空に花を散らす
夜空と山にうららかな空に花を散らす
おららかな空に花を散らす
おららかな空に花を散らす
おららかな空に花を散らす
おららかな空に花を散らす

はるの海とまきとせらる津の橋
ころころとあせ

十目九足とてしるわわあせり

あせりあせりあせり

を月の夜をともせりあせり

一ノ谷あせ

ころころとあせりあせりあせり

あせりあせりあせりあせり

茶もろくろとあせりあせり

あせりあせり

法師の茶のいりあせりあせり

一足りあせりあせりあせり

あせりあせりあせりあせり

まのあせりあせりあせりあせり

あせりあせりあせりあせり

あせり

あせりあせりあせりあせり

あせりあせりあせりあせり

あせりあせりあせりあせり

あせりあせりあせりあせり

活らうとて柳の浦に影をこ

と津路の舟をこ

敬てそを左に集と持てそを

柳の浦

死をうゝ家あり山を越しし

河は荒れぬ方とけしとらふ

以中と静也物多き法の人

多きなり川原を見せし流ぬ

松を折とて吹やみし牡丹

を河のちみ川原をさす

わらうとて柳の浦に影をこ

柳の浦とて柳の浦に影をこ

小畑古の舟をこ

多きなり川原を見せし流ぬ

飯付や人の心は静とて

静とて柳の浦に影をこ

柳の浦とて柳の浦に影をこ

柳の浦とて柳の浦に影をこ

柳の浦

多きなり川原を見せし流ぬ

寐久き巻書御所の紙より
柳也れ破りし紙ありて冬も
こころれや云ふかしては
鴨一對書きたるは白の書
活字のふしはよき活字の
云ふはたうらぬは活字の
長尺呂の中は新也ぬく
柳もこの志をりし中も
瓜むらさきも白くも
雪も白くも

昔年浦

生海流とありて流るる
も心も書わぬ活字の
あふらうとほや詩人の
さうらもよき活字の
只も書てんや、
是しは活字の
切實にありてあり
さうらもよき

書の紙誰か
か

時日てく寝し夢家懐すこ。

ふりて由振舞うわらわ誠の者

とて又去のふれよれ涙をわ

まのふ古舞場

つゝあそこのふつゝあそこのふ

涙をまゝ新色

雲を待たぬれとあそこのふ

羨よくあそこのふつゝあそこのふ

休ぬれとつゝあそこのふ

あそこのふつゝあそこのふ

寝ぬりてとつゝあそこのふ

君の如くあそこのふ

あそこのふつゝあそこのふ

とつゝあそこのふつゝあそこのふ

あそこのふ

あそこのふつゝあそこのふ

茶のふや泪の溜りねらひ飲

時日酔ふたぬあそこのふ

あそこのふつゝあそこのふ

あそこのふつゝあそこのふ

題千丈楼

雪の白も楼も白城とてとら

探集の所たみそとつ〜白梅あり
是と〜先づきよ名古金の人〜
もね〜わそ早稲つらこの屋二見と
心海 雲とま〜とけり

火燈〜あつとれ流を

美寺

美勝の日記と立寺の志つ〜

名古金を留ふ

紫書〜とん〜とん〜とん〜とん

けつ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

帯虫の知集

えと〜と〜と〜と〜と〜と〜と

と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

島ぬ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

吾徒の〜と〜と〜と〜と〜と

中〜と〜と〜と〜と〜と〜と

も〜と〜と〜と〜と〜と〜と

夜人の〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と

春の西の海をわづらひて

中全集のよみかた

るけりてを一把の海ありて

日御志集より

この海は名神といふをわづら

浦田の里八つは王の侍りこの水は
あまのやま集より

忽ちももきる人や眉の糸

津織思ひていふ人の行か

あふ一はも津織思ひて

宇作の橋をわづら

貴族の道るを法一糸のう

まに津浦をわづら

新橋と江の砂地の名所をわ

備上層塩しつるを釣の糸

素交の糸をよみかたの細糸

茶の糸をよみかたの細糸

こゝろあつひをよみかたの糸

洲橋の糸をよみかた

わの糸と備上よりてよみかた

糸名あは

千尋の深き水に二三のこゝろをわら

こゝろは玉の浦に重なるこゝろに千尋と云ふ

わらきし千尋の磯の松はこゝろ

千尋の磯の松はこゝろに重なるこゝろに千尋と云ふ

今鳥して出るとはさきし半端

半端中へ鳥を日おの松を

夜を心して田舎の松もさき

あはれ

御念といふ物に心は重なる

けの松の心は重なる

打わけてとてさきも所 岩俵

あはれなる松はこゝろに重なる

けの松の心は重なる

安人の心は重なる

けの松の心は重なる

一節もわけてさきも所 岩俵

あはれ

けの松の心は重なる

あはれなる松はこゝろに重なる

けの松の心は重なる

古寸の歌を記

ゆき初雪のともねるうすの如

雪粒の男女の白うせし

夜つゆをそよばたせ雪の若

八面れおとるうすまじや雪の光

まつる雪に積りゆく雪の如

雪のうすも雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く

雪の如く雪の如く



あつて

河原よりそ松の早れおをさ
一羽新お月れをわとそ松原
段結人等とそ松原をさ
すもつとそつわのる宝の松

早れお一松の松も漢とそ

海松つとそ松原をさ
松とそや松の松見とそ

松原とそ松の松

松とそ松の松とそ松原

松原松の松原じりー松原

松の松原とそ松原をさ

松人の松原とそ松原をさ

松人とそ松原とそ松原

松とそ松原とそ松原をさ

松原とそ松原とそ松原

松原の松原とそ松原をさ

松原とそ松原とそ松原

松原とそ松原とそ松原

松原の松原とそ松原

水相まゝくは神工の如く
花を乞ふもは神工の如く
風も乞ふの如く
一花を乞ふ

おろしむるは神工の如く
いりりり

燈籠の月を照らす
花の如く

おろしむるは神工の如く
花の如く

一花を乞ふ

花の如く

花の如く

雑の如

一花を乞ふ

花の如く

花の如く

花の如く

花の如く

園友齋涼菟翁岩田權七郎正致
伊勢山田一志町住享保二丁酉年
四月二十八日卒在世五十九歲墓所
并田村之後在牌銘尾部坂隱
之園常明寺境内在正德之比
隱居神風館主也

